巻頭言

入会時の雑感：「人のつながり」，「国のつながり」

松　本　和　男*

21 世紀がスタートして今年で 25 年になる．同時に先の太平洋戦争が終わって 80 年になるが，わが国においては平和な世の中と言われる．極めて喜ばしいことである．

一方では，先進諸外国と比べて，産業界全般の低成長とアカデミア分野の国際的な評価低下も問題視されている．明るい将来展望の話題が聞こえてこない．「何故，このような情況に陥ってきたか」が話のネタになることが多い．複合要因のためか，明解な回答に出会ったことがない．ここで，筆者の限られた記憶，経験の中で，終戦後を振り返ってみたい．

1945 年の終戦直後は，否応なく米国主導の世の中であった．その後，徐々に欧米の文化が押し寄せ，次第に近代工業立国となり，欧米型都市化が進んだ．20 世紀後半には，高度経済成長期を迎え，生活も豊かになり，諸外国から一目おかれるような時代もあった．国民にとって，良いことが多かったように思う．振り返って，この時代は日本人の助け合い，支え合いに基づく日本型組織・雇用制度などによる連帯感（チームワーク）が漂っていたように思う．

一方，この過程で徐々に核家族化も進んだ．それに伴い，本来の日本型家族が崩れ，連帯感なども薄れてきた．この流れは企業などにも蔓延してきた．職場においても，お互いが助け合い，支え合うという相互協力の機運が薄れてきたように思う．さらに筆者の個人的見解であるが，21 世紀になり，さらにその傾向が強くなってきたように感じる．この頃から，大手企業における不良品問題，大規模工場事故などが何度か TV ニュースの話題になった記憶がある．この現象が徐々に国全体の生産性，経済力の低下に繋がってきたように感じる．さらに，少子高齢化社会への移行と重なり，主要諸外国と比べて，イノベーション不足による生産力，経済力が落ちてきたのかもしれない．

日本（人）のお互いに信頼し，「支え合う」連帯感（チームワーク），使命感が残っていれば，現在のような落ち込みはなかったと思われる．言い換えれば，心の温もり・心の通いが少なくなった分，産業界の生産性，アカデミア領域のランクダウンにつながってきたと考えられないか．

突如として，2019 年末から 2023 年末位まで，新型コロナ禍により，人流が制限された時期があった．リアルな各種会合などが行われなくなり，通信技術による電子媒体の発展もあり，face to face の機会が極めて少なくなってきた．このような情況がしばらく続いたこともあり，日本(人)の過去の特長が薄れてきたようにも思える．

ただ，ごく最近になり，お互いに支え合い・助け合い「共に生きる社会」を取り戻すことの必要性が高まってきた感がある．特に，地域格差，世代間格差，男女間格差，専門性格差については，巷間でも話題になってきた．それだけに，地域，年齢，職制，学歴，男女にこだわらず幅広い層の間で「共に話し・考える」コミュニィティの必要

*㈱ナールスコーポレーション（大学発ベンチャー），取締役会長（元・田辺製薬㈱常務・東京総括）

性が謳われるようになった．イノベーションの観点からも多様性も求められるようにもなった．

名称だけを知っていたが，数年前（新型コロナ時期），本研究所（公益財団法人海洋研究所）と近畿化学協会による「京都化学者クラブ」に初めて出席した．本研究所・評議委員の左右田健次・京大名誉教授と中西正己・京大名誉教授のご講演を聞かせていただくためであった．内容の素晴らしさはもちろんであるが，その後の質疑応答の雰囲気は，まさに上述してきた「共に話し・考える」そのものであった．京都に face to face のお手本が残っていることに感動した．こじんまりした会合ではあるが，この会の雰囲気が，各地に伝播すれば，以前の日本人の連帯感などの特長が再現され，企業においては生産性，競争力が，アカデミア領域ではランキングの高い大学に回復するのではないかとの期待感が湧いてきた．

京都化学者クラブはほぼ毎月開催されるので，その後も何回も参加させていただいた．その都度，この雰囲気が広く拡がってほしいと思うようになった．

本研究会の名称の「海洋化学」にも魅力を感じた．定例会合では，幅広いテーマもあるが，本来の「海洋化学」に関するお話も多い．化学を軸とした物理，生物，分析などを含む学際的な内容に富んだ，むしろ「海洋科学」でも通じる幅広さを感じた．医薬品，化粧品を業としてきた筆者には，難解な中にも新鮮味を感じることが多かった．それが筆者自身の活性化剤にもなってきた．さらに，講師先生との名刺交換から，新たな人脈ができた．「人のつながり」の実践場でもあった．それに味をしめ，今なお参加させていただいている．恥ずかしながら，これまで「無料」でお世話になっていたことに気がつき，85 歳になる年に入会させていただいた．事務局のお計らいにより，入会の前の第 44 回石橋雅義先生記念講演会（2023 年）に参加させていただいた．もちろん，正会員の立場で 78 周年秋季講演会（2024 年）にも参加した．

それらの講演から，新たな考え方をしなければと思うようになった．例えば，海洋と炭素循環の話題，地球の温暖化に直接的に関係ある科学的テーマ，南極氷床の大規模融解の現状のお話などから，地球温暖化に対する意識を高める上でも他人事でないことを感じた．海洋における植物プランクトンのお話なども，これからの水産業，食糧問題を考える上で，全世界の人々にとって，極めて身近な課題と感じた．特に，地球全体が海洋でつながっており，世界が一つであり，改めて，他人事ではないことに気づいた．各国がそれぞれの地域で，自然の保護，海洋資源の確保に関わるべき必要性を強く感じた．新聞，テレビでこれらの情報を目にしていながら，普段は真剣でなかったことを反省する機会にもなった．

関連して，温暖化対策の大規模会議として，昨年の 11 月にアゼルバイジャンで COP29（第 29 回国連気候変動枠組み条約国会議）が開かれた．開始当初から日米欧の首脳が欠席するような状態であった．脱炭素がメインテーマであったが，期待されたような結論には至らなかった．温暖化により，世界中に異常気象が頻発している状況を考えると，ウクライナ，中東等での人殺し戦争をしているような段階ではないと思うのは当然であろう．関係首脳陣には，まず「人のつながり」を考えていただきたい．自ずと「国のつながり」になると信じたい．